# 文部科学省指定事業

# 令和５年度　新時代に対応した高等学校改革推進事業

# 【普通科改革支援事業】

## 実施報告書（第２年次）

令和６年３月

高知県立清水高等学校

# 目次

Ⅰ　巻頭言　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

Ⅱ　本校の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

Ⅲ　令和５年度　事業の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

Ⅳ　実践報告Ⅰ「１年生総合的な探究の時間　活動報告」　・・15

Ⅴ　実践報告Ⅱ「２年生総合的な探究の時間　活動報告」　・・22

Ⅵ　実践報告Ⅲ「３年生総合的な探究の時間　活動報告」　・・30

Ⅶ　実践報告Ⅳ「２１世紀のジョン万育成プロジェクト」　・・35

Ⅷ　実践報告Ⅴ「教科等横断型学習」　・・・・・・・・・・・・・48

Ⅸ　実践報告Ⅵ

「土佐清水市ジオパーク推進協議会と連携した学習」　・・53

Ⅹ　実践報告Ⅶ

「ミネルバ式の教授法を活用した授業改善」　・・・・・・・56

Ⅺ　実践報告Ⅷ「高知みらい科学館・高知大学訪問学習」　・・60

Ⅻ　実践報告Ⅸ　先進校視察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

参考資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

指定校事業概念図

高校魅力化評価システムの結果（抜粋）

高知県オリジナルアンケート

# Ⅰ　巻頭言

報告書の発刊にあたって

高知県立清水高等学校長　田中　修一

本校が文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業　普通科改革支援事業」の指定を受け２年目となりました。土佐清水の偉人、中浜万次郎（ジョン万次郎）の生き方や考え方をカリキュラムの核心に位置付け、開発するという大きなテーマに挑戦をしています。本年度は、本校が目指す学びの実現について、より具体的なアプローチとして「地域をフィールドとした学際的な学び」を掲げ、カリキュラムの内容検討、試行実施、効果検証等さまざまな取組を行いながら、研究の歩を進めて参りました。

また、本年度から地域との連携をさらに強化するために、地域連携コーディネーターを配置し、地域人材を活用した探究の深化、生徒がこれまで以上に地域で活動する機会の創出、そして、地域と一体となった学校教育活動の在り方の検討等、幅広く実践研究を行ってきました。地域の方々が、学校での講義、助言、発表会への参加等により来校される回数が増え、生徒たちの活動にも真剣に対応していただき、そのおかげで生徒たちが目覚ましく成長する姿も見られました。このような献身的なご協力に心から感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

教職員では、いくつかのワーキンググループを編成し、熱心に議論を重ね、計画を実施してきました。生徒の成長が教職員の成長、進化に通じていることにも大いに意義を感じています。

本年度は、実践研究から課題を見出し、改善点を絞り込む、いわば「とにかくやってみる」という視点を持つようにしました。その結果、予想以上の成果を上げることができたこともあれば、結果が思うように結びつかないようなこともあり、課題はありますが、さまざまにチャレンジしてきたことは大いに意味がありました。取組が進むほどに、課題、いわば取り組むべきことが明確になってくることは一つの収穫であると考えます。

アメリカの教育思想家、ジョン・デューイが言う「探究とは疑念に始まり、疑念を除去する条件を作ることに終わる。疑念を除去する条件が作られるとは、信念が作られることである。」という言葉を信じ、今後も研究を継続したいと思います。

今年度、生徒が大学等、学校外で学ぶ貴重な機会を設けていただいたり、協議会等では委員の皆様から多くのご助言を賜ったり、また、先進的な取組等を視察させていただいたり、本校の取組について、多くの関係者の方々にご協力を賜りました。この場をお借りしまして改めて感謝を申し上げます。

まだまだ、険しい道の途上にある本校の研究ですが、ジョン万次郎のようにあきらめずに、粘り強く取り組んで参りたいと思います。どうか引き続き、ご指導をいただければとの思いを添えて、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

令和６年３月　吉日

# Ⅱ　本校の概要

1　所在地　〒787－0336　高知県土佐清水市加久見８９３－１

2　学校の基本理念

（1）校訓　　「自由」「平等」「博愛」「寛容」

（2）教育目標

地域の未来を担う人材の育成

～地域にとってかけがえのない高等学校として～

（3）目指す学校像

生徒一人一人が確実に成長できる教育活動を展開し、地域や保護者等からの信頼を得ることで、生徒及び教職員が自信と誇りを持てる学校

（4）目指す生徒像

①　「確かな学力」

習得した知識及び技能を課題解決のために活用する思考力・判断力・表現力を身に付けることで、生涯にわたって学び続ける資質・能力が備わった生徒

②　「人間力の涵養」

困難な状況に置かれても、的確に状況を分析し、解決に向けて最後まで前向きに、粘り強く取り組もうとする生徒

③　「社会性の育成」

他者と協働し、さまざまな課題を解決しようとすることで、地域社会の構成員としての自覚と責任を持ち、地域に貢献しようとする生徒

（5）目指す教員像

①　高い専門性と指導力をもつ教員

②　柔軟性と想像力を備え、生徒に夢を与えることのできる教員

③　使命感と倫理感、豊かな人間性をもつ教員

（6）学校経営方針

伝統、校風を継承するとともに、組織的な学校運営に努め、生徒の実態や社会の変化を踏まえながら、教育活動の計画、実践、評価、改善を行う。そして、生徒が満足し、保護者等や地域に愛される学校を創造する

（7）重点的な取組（全日制）

①　基礎学力の定着と学力の向上

②　社会性の育成

③　基本的な生活習慣の確立

④　地域及び連携型中高一貫教育の推進

⑤　生徒理解・生徒支援の充実

⑥　国際理解教育の推進

（8）生徒数（全日制）

96 名（１年：22 名、２年：48 名、３年：26 名）

# Ⅲ　令和５年度　事業の概要

1　事業の実績

（1）カリキュラムの検討内容

「21 世紀のジョン・マン　”Think Globally, Act Locally”」をカリキュラム開発のメイン・コンセプトに設定し、「①自然科学、社会科学、人文科学の各分野について、横断的に学び、専門性にとらわれない柔軟な思考を身に付けることができる」、「②課題や目的を自ら設定し、国際的な視野で問題を解決しようとする態度を身に付けることができる」、「③多様な他者と協働して新たな価値を創造する力を身に付けることができる」、この３つの力を身に付けた人材を育成することを目的としたカリキュラム開発を行った。

カリキュラム開発については、「特定の分野に偏らない学びを実現させるため、文理融合した教科等横断的なカリキュラムを開発すること」、「最先端の科学を学ぶため、自然科学・社会科学・人文科学等の分野について、大学、研究機関、官公庁、民間企業等と連携すること」、「国際的な視野を身に付けさせるため、英語教育を充実し、国際交流を促進すること」、「コンソーシアムと連携し、学校内外が一体化した教育活動を行うことで、社会に開かれた教育課程を実現すること」の４点を目標として取り組むこととした。具体的な取組の内容は以下のとおりである。

取組①　カリキュラム開発

（ア）ワーキンググループによる推進体制の構築（実践報告Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ参照）

（イ）コンソーシアムとの連携（実践報告Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ参照）

（ウ）教科等横断的な授業の実践（実践報告Ⅴ参照）

取組②　地域連携事業

（ア）地域連携コーディネーターと連携・協働した地域とつながる総合的な探究の時間の計画

（実践報告Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ参照）

（イ）地域商店街活性化事業への参加

土佐清水市地域コンソーシアムと連携し、土佐清水市の中心商店街で開催された地域商店街活性化事業「清水まちの魚市」に、本校と清水中学校の生徒が参加・協力した。本校では参加の目的を、地元への理解を深め、郷土愛を育むこととしており、地元住民や中央商店街を訪れる方々と交流する良い機会になった。

また昨年度は、高校だけの参加であったが、今年度は中学校も加わり、中高合同で企画段階からイベントに携わり、地域との関わりを深めることで、自己有用感を高める機会ともなった。月１回、市役所・商工会議所・商店街・中学校・高校等の担当者で実行委員会が開催され、委員会には、中学校から生徒４名、本校から生徒７名が参加した。イベント当日には、本校から美術部、音楽部、写真部、家庭被服部、ボランティア部、家庭クラブの生徒 31 名と教員 10 名が参加した。

（ウ）民間企業との連携強化

昨年度より学校運営協議会の委員として、土佐清水市に所在する四国最大級のリゾートエリア「The Mana Village」を運営する小泉貴裕氏に依頼して、学校振興についての助言をいただくとともに、学校と地域との連携における中心的な役割を担っていただいている。

令和５年８月には、本校の生徒１名をインターンシップで３日間受け入れていただいた。また、２周年記念イベントには本校の複数の部活動が参加し、それぞれの取組を披露することができた。今後生徒が、インターンシップや各種イベントに定期的に参加させてもらうことにより、企業と生徒との活動の定着化を図っていきたい。令和６年度はホテル部門の担当者を地域学校協働活動推進員に委嘱し、連携強化を図っていくことを検討している。

（エ）土佐清水市地域コンソーシアム

土佐清水市では地域の未来を創造する人材を育成し、土佐清水市の活性化を図るために、土佐清水市地域コンソーシアムを設置している。令和５年７月 10 日には本校の校長、教頭、主幹教諭、事務長、国際教育及び地域連携コーディネーター２名が地域コンソーシアム会議に出席した。会議では一般財団法人　地域・教育魅力化プラットフォームの取釜宏行氏による「地域に開かれた魅力ある学校とは」と題した講演や、本校校長による「土佐清水市地域コンソーシアムにおけるアクションプランについて」の説明を行った。昨年度策定したアクションプランについては、まだ一部しか実施ができていないため、小中高の担当者が協働し、実施ができるように取り組む。

取組③　中高一貫教育事業

土佐清水市連携型中高一貫教育推進協議会を開催し、高校移転後（令和６年度中に中学校隣接地の高台へ移転）を見据えた中高連携の目指すべき方向性を協議した。協議会では、事業内容として学力向上、キャリア教育を推進するため、中高交流授業の実施や、授業改善に向けて中高の教員が教材研究や指導方法について協議する場を設け、「公開授業を通して相互理解を深めること」、「中高６年間を見通したキャリア教育を推進するとともに、各種検定等の資格取得に向けた支援等を行うこと」、「部活動や学校交流の活性化、地域交流を推進すること」について検討した。

取組④　グローバル教育（実践報告Ⅳ参照）

取組⑤　先進校視察（実践報告Ⅸ参照）

（２）高等学校における事業の実施体制や管理方法について

校内研究推進体制として、学際領域学科検討委員会（以下「検討委員会」という。）を立ち上げ、校長を委員長、教頭を事業総括責任者として位置づけ、主幹教諭、総務主

任、教務主任、生徒指導主事、進路指導主事、各学年主任、国際教育及び地域連携コーディネーターを構成員とし、カリキュラム開発に取り組むこととした。

検討委員会は、毎月１回開催し、年度当初に目的等の研究構想全体の共有を図り、総合的な探究の時間や学校設定科目、国際理解教育の年間計画を策定した。年度末の達成目標に向けて、各月別の進捗状況を確認しながら取り組んだ。

検討委員会の主な事業内容を以下のとおり設定した。

①本事業で目的とする人材育成に向けたカリキュラム
（総合的な探究の時間・学校設定科目・国際理解教育）を開発し、学際的な学びを推進する。

②WG（ワーキンググループ）の協議及び達成状況等の進捗管理を行う。

検討委員は、運営指導委員会及びコンソーシアムにオブザーバーとして参加している。その中で必要に応じて学校の取組等を説明し、運営指導委員会による指導・助言に対する修正及び再構築等について検討委員会で協議した。

また、事業における取組に対して、大学や研究機関との連携を行う場合は、検討委員が窓口となり、各機関と協働的な研究を推進する体制を整備した。

事業の検証については、高校魅力化評価システムの中の６項目について指標を設定し、検証の材料とした。

（３）運営委員会の体制および取組

ア　体制

| 所属 | 氏名 |
|---|---|
| 関西学院大学　教育学部　准教授 | 岩坂 二規 |
| 高知県公立大学法人　理事長 | 伊藤 博明 |
| 高知学園大学　教授 | 近森 憲助 |
| 土佐清水市教育委員会 | 斧川 哲也※ |
| 高知県教育委員会 | 長岡 幹泰 |

※　前教育長　岡﨑哲也氏の退任により、斧川哲也氏が就任

イ　内容

a　<u>第１回運営指導委員会での協議内容等</u>

(a) 日　時：令和５年９月 14 日（木）13:30～15:30

(b) 場　所：高知県立清水高等学校　会議室

(c) 出席者：

(運営指導委員)

伊藤博明委員、岩坂二規委員 、岡﨑哲也委員、近森憲助委員

(学校)

校長　田中修一、教頭　上岡正紀、事務長　岡本直也、
主幹教諭　南友博、教諭　金井美穂、教諭　﨑山沙耶香、
教諭　西島龍太郎、教諭　深原大誠、
国際教育コーディネーター　谷富貴、
地域連携コーディネーター　二宮真弓、

土佐清水市教育の魅力化コーディネーター　岡村相良
（高等学校振興課）
課長　野田健一、課長補佐　長岡潤司、チーフ　中越啓介、
指導主事　尾﨑靖司

(d) 協議内容

【協議題】「生徒の個人探究を深めるために、教員がどのように関わるべきか」

（委員からの助言）

・生徒たちに探究テーマを持たせるということは難しい。
・解決方法がわからず、思いついたことをインターネットで検索して終わってしまう現状があるのではないか。
・高校生というのは思考する方法も手法もわからない。ChatGPT など、視点探しに使えるような情報を提供すれば、生徒もどんどん課題に取り組む意欲がわくのではないか。
・探究でいえば、「本質は何であるか、何のためにやっているのか」というようなことを考え続けることが探究ではないか。本質をしっかりと見極めていくことが、教員にとって非常に大切である。
・探究は「何のためにやっているのか」という本質、そしてその目的をしっかり明確にすることが大切である。
・「本質をしっかり見ていこう」というのが「探究」である。教員もそのような思考を持って、授業に臨むことで、子どもたちにその探究の精神、考え方がしっかりと伝わっていくのではないか。
・教員も一緒に探究学習に取り組むことで、事象をより深く掘り下げ、本質を考えることが可能となるのではないか。
・清水高校は、少人数ということもあり、情報共有が密に行えることで、一番大事な教員と生徒との信頼関係を築くことができている。それこそが探究活動にも大事となる。
・教員にとっての探究は、一市民として、大人として、人間として、教員自身が社会活動に参画し、あるいは社会的な立場や、これからの生き方を生徒と一緒に考えていくような探究でなければ、生徒の意欲や高揚感は生まれてこないのではないか。
・教員が、社会的な出来事にどのような関心を持っていて、社会的な学びや活動に普段どのように向き合っているかということを、生徒に伝えることも非常に重要である。
・探究学習が発展し、ボランティア活動やサークル活動を教員も一緒になって参加する。そういう組織が生まれてくると、生徒にとっては学んで評価されて、終わりではなく、学んだことから、さらに実践につなげて、実際に生徒が何かを社会に対して提案したり、変えていったりできる場づくりが地域の中や学校の中で、そのような環境があるということが非常に重要なことだと考える。
・「思いつき探究」や「無理やり探究」では、答えやアイデアはうまく出てこない。「どういう風な目的で、何のために実施するのか」ということを伝えれば具体的にイメージできるのではないか。

・生徒の周りで地域課題として実際に１７のSDGsの目標とターゲットに直接関連するような事例があれば、それを拾い上げることで、子どもたちに近いエピソードが出てくると思われる。そのようなエピソードを活用し、将来どういうことをやっていけばこの問題が解決に近づいていくのかということを考えるところまで取組が進むと、意味のあるものになるのではないか。
・校内のWGでは、通常の教科や科目の中でも、探究的なものを浸透させていきたいという話題があったが、指導書やティーチングマニュアルを作成し、教員全体で取り組むところまで活動ができると、今後の具体的な取組が見えてくるのではないか。
・WGが中心となり探究の精神やエッセンスを含んだ一つのモデル授業を作成する。そのようなモデル授業プランを作成するなどの取組を行うことで、教員の意識も変化するのではないか。

(e) 協議内容のまとめ
・「思いつき探究」や「無理やり探究」というようなものには、ChatGPTというようなツールの活用方法もある。それを使って創出したものをそのまま活用するのではなく、「土佐清水にとってどうか」と考えていくと視点が広がるのではないか。
・探究というものは、探究が目的ではなく、「何を知りたいのか」という、知ることを通して、「何が」「どうなるのか」、あるいは「改善される」のかなど本質を見極めていくということが重要である。
・探究の一つの成果として、教員と生徒が共に学ぶ仕組みが生まれている。例えばボランティア活動などを通して、教員と生徒が一体となって活動していくことで、実際に清水高校が抱えている課題を解決する手立ての一つとなっている。そのような探究活動の成果もあるのではないか。
・「探究材料をどのように提供していくか」について、生徒にとって地元地域である土佐清水の課題とSDGsを関連させることで清水高校独自の授業モデルをつくることがよいのではないか。

b <u>第２回運営指導委員会での協議内容等</u>
(a) 日　時：令和６年１月29日（月）13:30～15:30
(b) 場　所：高知県立清水高等学校　会議室
(c) 出席者：
(運営指導委員)
伊藤博明委員、岩坂二規委員、近森憲助委員
(学校)
校長　田中修一、教頭　上岡正紀、事務長　岡本直也、
主幹教諭　南友博、教諭　金井美穂、教諭　山﨑大、教諭　小島大和、
教諭　森摂子、教諭　武政亮二、教諭　川村圭司、教諭　氏次礼、
教諭　深原大誠、教諭　西島龍太郎、
国際教育コーディネーター　谷富貴、
地域連携コーディネーター　二宮真弓、

土佐清水市教育の魅力化コーディネーター　岡村相良
（高等学校振興課）
課長　野田健一、課長補佐　長岡潤司、チーフ　中越啓介、
指導主事　尾﨑靖司

(d) 協議内容
【協議題】「地域課題探究から、国際的な視野を持つための方策は」
（委員からの助言）
・アンケート分析はいろいろな条件を多角的にみていく必要がある。
・なぜ学ぶのかを自己認識しなければならない。学びの本質にどこまで迫ることができるのか。
・どのようにして、生徒の視野を広げていくか地理的要因に捕らわれない形で学びの場を提供したい。
・質的な調査をし直すことが大事。ヒアリングや個別の答えの背景に、どのような思いがあったのか。探究学習は、取り組めば、取り組むほど課題が見えてくる。課題に対してあきらめずに取り組む姿勢が大事。
・質的な調査から読み取った生徒の態度の変容を報告してもらいたい。
・生徒が話しやすいことが大事であるので、グループインタビューや座談会的な形でインタビューするのもいいのではないか。
・学校側の評価の視点として、グローバルな視点とはどういうことかを明確にしなければ評価ができないと思う。また生徒も困るのではないか。
・SDGs を一つのグローバルな視点として評価をしていくことが必要ではないか。
・何をグローバルな視点と定義づけるかを決めないと、評価にいたらない。
・ジョン万次郎をシンボルとして、グローバルな視点とは、ジョン万次郎の行動や考え方から導き出してくることが成果の視点につながっていると考えてもよいのではないか。
・ジョン万次郎の物語では描かれていなかった時代背景に基づいた人権問題等に焦点を当てて取り組んではどうか。
・ジョン万次郎が生きた時代には、グローバルという考え方がなかったと思うが、ジョン万次郎は、グローバルな生き方をしてきたと捉えることができるのではないか。そういったことを評価の視点にしてみると、面白いのではないか。生徒一人一人をジョン万次郎のような人間に育て上げたいという方向でもいいのではないかとも思う。
・ジョン万次郎のコピーを作るのではなく、生き様を学ぶことで自分の人生を見つけていけたらいい。
・生徒が自分の状況を理解したうえで問題を分析することが重要。
・英語テキストの題材であるジョン万研究はその後どうなったか、その中でのグローバル視点はどのようにまとめていくのか。
・生徒と一緒に活動や取組を言語化していくことが、大事である。
・何か叩き台を作成して取り組んでみて、スムーズであればそれを発展させればいいし、そうでなければ修正していくことを検討してみてはどうか。踏み

出したことによって、いろいろなリアクションが返ってくるので、そのリアクションをもとにして、進めていく方法がよいのではないか。

・地域資源として、ジオパークは活用するべき。ジオパークを通してグローバルな活動の入口を作ることができる。

・高校生がジョン万次郎について地元小中学生の前で出前授業を行うことは、生徒のモチベーションをあげるにはよい方法ではないか。

・３つの能力の達成状況は、アンケート項目が達成できているかどうかで判断できるのではないか。

(e) 協議内容のまとめ

・アンケート結果において、生徒が回答したことの背景を知ることは必要である。そのことにより生徒の考えていることや思っていることを学びに生かしていくことが重要である。

・ジョン万次郎の生きた時代において、現代のように人権意識は確立していなかったのではないか。ジョン万次郎を考えるときに、多角的な視点で取り上げてみると、学びを深めるきっかけとなる。また、ジョン万次郎について学んだことを、地元小中学生の前で発表することで生徒のモチベーションを高めることにもなり、さらに学びが深まる。

・探究活動において、生徒と一緒に教員自身も取り組むことが大切である。取り組むことにより、リアクションが返ってくる。そのリアクションをもとに次の取組を考えるという方法もある。

（４）コンソーシアムの体制および取組

ア　体制

| 所属 | 氏名 |
|---|---|
| 高知工科大学　事務局役識者　企画監 | 福田　直史 |
| 高知大学　地域協働学部　准教授 | 今城　逸雄 |
| 土佐清水ジオパーク推進協議会　ジオパーク専門員 | 土井　恵治 |
| （株）リクルート　横断人事統括室　ヒトラボ | 福田　竹志 |
| （株）キャリアリンク　代表取締役 | 若江　眞紀 |
| 清水小学校　校長 | 佐竹　正史 |
| 清水中学校　校長 | 斧川　哲也※ |

※　現土佐清水市教育長

イ　内容

c　<u>第１回コンソーシアム代表者会議での協議内容等</u>

(a) 日　時：令和５年８月 28 日（月）14:00～16:00

(b) 場　所：高知県立清水高等学校　会議室

(c) 出席者：

（コンソーシアム代表委員）

今城逸雄委員、土井恵治委員、福田竹志委員、佐竹正史委員

斧川哲也委員、

（学校）
校長　田中修一、教頭　上岡正紀、事務長　岡本直也、
主幹教諭　南友博、教諭　岸本浩明、教諭　森摂子、
教諭　金井美穂、教諭　﨑山沙耶香、教諭　武政亮二、
国際教育コーディネーター　谷富貴、
地域連携コーディネーター　二宮真弓、
土佐清水市教育の魅力化コーディネーター　岡村相良
（高等学校振興課）
指導主事　尾﨑靖司

(d) 協議内容

（委員からの助言）

・３年間で少なくとも２単位以上の学校設定教科・科目を設置する必要がある。現時点で本校では、これを３年間で３単位時間を想定しながら、計画を進めている。それをどのように配置するのか検討が必要。学校設定教科・科目というのはジャンルを区切らず、全ての生徒が同じことをしっかりと学んでいくことが必要。

・教科等横断的な学びを実現するために、現行の教育課程の見直しも必要。学んだことをどう生かすかというよりは、将来のために自分の学びをどのように作っていくかというような視点で、教科での学びを成熟させていく必要がある。

・授業の中で、答えが出てきたら終わりではなくて、「なぜ」や「それでいいのか」など、常に次へつなげるための問いを授業の中で投げかけていく。それが、螺旋でつながっていくように授業実践していくことが必要。そのようでなければ、興味関心は持続しない。実際に清水の子どもたちで、清水の良さや、清水が抱える課題を知らない子どもが多くなっている。

・生徒に常に声をかける、「何で」「それ大丈夫」「それでいいの」という声掛けが、小学校・中学校あるいは高校でも必要と思われる。生徒は自分たちで疑問点を見つけられないと思われるため、周りの教員の声掛けがある程度必要なのではないかと思われる。

・「土佐清水の教育資源をどう生かしていくか」「子どもたちの学びに、どうつなげていくか」について、インターンシップや親の仕事を見学するなどし、そこで感じたことを振り返らせて「何が残った。では、次はどういう協議をするのか」と考える教育の場を提供できればいいのではないか。

・「意外と知っている」ということがあれば、その企業を調べ、企業が取り組んでいる事業と土佐清水は、どうつながっているのかという視点で考えてみたら、より現実的な清水の実態を知ることにつながるのではないか。

・「知らない」ということを、生徒と教員がお互いにもっと一緒になって考えていくことで、お互いにヒントが出てくるのではないか。知らない世界だから「知りたい」と思うが、教員は学び・教えるという体質がある。教員も一緒に楽しめる取組になればよいと考える。

・教員が楽しむ、面白がるというのはすごく重要なこと。その分教員もさまざまなことに興味関心を持たないといけない。しかし教員の負担も考慮するべき。

・教員に問題意識や興味関心がないと、問いが出てこない。子どもたちに促しを与えるために、教員の負担は増加することが考えられるが、「一緒に楽しむ」「一

緒に興味をもってやる」ということが必要だと思われる。

・やはり子どもたちには経験が必要。経験そのものはなかなかできない部分もあるが、疑似体験することだけでも、気づくこともあるのではないか。

・土佐清水市の行政担当者に、土佐清水市の現状や課題などについて、聞いてみるのも土佐清水市を理解する上で、大事なことではないか。

・探究では、生徒と一緒になって、教員も探究していくというスタンスが重要。そのような考えを持たないと、教員は教える立場、教え込まないといけないという真面目さもあって、その殻を破れない現状がある。

・自分にとって関心のあることを、社会的な課題として捉え直すことは、効果的である。

・他校の生徒や上級学校の学生とコミュニケーションを図ることによって、知識を広げるだけではなく、自分の考えや思いを深く掘り下げる機会となる。また生徒自身の成長につながると考える。オンラインなども活用しながら、いろいろな世界を知るきっかけとして、地域の方々にも協力を仰いでいきたい。

・インターンシップは、単なる職業理解のインターンシップではなく、自分が学んできたことを、社会の中でしっかり確認するような、そういう経験、学びが必要なのではないか。

(e) 協議内容のまとめ

・授業の中で、探究を完結させるのではなく、教員が「なぜ」と発問を投げかけることにより、常に次につながるような学びにしていくことが必要である。

・教え込むことに慣れている教員が多いことから、生徒と一緒になって学ぶというスタイルに抵抗がある。特に探究活動では、生徒とともに、教員自身でも興味関心をもち、臨むことが大切である。

・探究の視点として、地域や市民と密接に関わる行政の担当者に直接、清水が抱える課題や問題を聞くことで、地域の実態や新たな視点を見いだすことにつながる。

（５）コーディネーターの配置および活動内容

ア　体制

国際教育コーディネーター：谷富貴　氏

地域連携コーディネーター：二宮真弓　氏

イ　活動記録（実践報告Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ参照）

国際教育コーディネーター及び地域連携コーディネーターの２名を配置している。活動内容は以下のとおりである。

①大学・研究機関等における最先端の研究や、地域の関係機関と連携した地域資源の活用を通して、高校との学びをマッチングさせるコーディネート業務

②総合的な探究の時間における、生徒への直接的な助言

③国際交流活動において、探究的・体験的な学びとなるよう協議の場の設定

④英語教材のデータ化及び英語教育の担当者会における系統的な教育課程開発についての助言

⑤地域連携について、探究及び地域課題解決学習等に関わる関係機関との交渉、講師の依頼等の業務全般

（６）新学科の設置及び配置に向けた検討状況

清水高校が目指す学びとして、目指す人物像を「21 世紀のジョン万次郎」と位置づけた。「21 世紀のジョン万次郎」とは、①論理的思考力を備えたグローバルな人材、②地域の各産業を担う人材、③地域コミュニティをけん引する人材を表し、このような人材を育成するために求められる資質・能力として、①自然科学、社会科学、人文科学の各分野について、横断的に学び、専門性にとらわれない柔軟な思考を身に付けていること、②課題や目的を自ら設定し、国際的な視野で問題を解決しようとする態度を身に付けていること、③多様な他者と協働して新たな価値を創造する力を身に付けていることが必要だと考える。

資質・能力に関する課題として、令和４年度の分析から「学ぶ」ことの意味や価値を位置づけ、将来にわたって学び続けることができるか、日本や世界の現状に目を向け、広い視野で自分や地域を見つめることができているか、地域や社会の状況を的確に把握し、課題を解決しようとしているかが挙げられた。令和５年度は、①探究の推進、②経験を積む、③視野を広く持たせる、④貢献への意欲を醸成することを視点として、地域をフィールドとした学際的な学びを目指し、総合的な探究の時間、教科等横断的な取組、学校設定教科・科目「清水学際」について検討した。

ア　総合的な探究の時間（実践報告Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅺ参照）

イ　学校設定教科・科目「清水学際」の検討

学校設定教科・科目「清水学際」は、SDGs の 17 の目標から「9　産業と技術革新の基盤を作ろう」「10　人や国の不平等をなくそう」「11　住み続けられるまちづくりを」「14　海の豊かさを守ろう」「15　陸の豊かさも守ろう」の５つのゴールについて、学習内容を検討した。

・「14　海の豊かさを守ろう」「15　陸の豊かさも守ろう」

土佐清水市の自然環境について、地域人材や大学教員による講義やフィールドワークを実施する。またジョン万次郎が生きた時代の海や陸といった自然環境を現代と比較することにより、地域についてより深く理解し、地球規模での環境について探究を行う。

・「9　産業と技術革新の基盤を作ろう」「11　住み続けられるまちづくりを」

土佐清水市の産業や福祉等の実際について、地域人材や行政職員、大学教員による講義やフィールドワークを実施する。またジョン万次郎が生きた時代での福祉、産業、まちの暮らしを比較することにより、今後の土佐清水市を考えるきっかけとし、世界の中の地域について探究を行う。

・「10　人や国の不平等をなくそう」

ジェンダー平等をはじめとして、さまざまな人権課題について、土佐清水市及び近隣の市町村がどのような取組を行っているかについて、地域人材や大学教員によ

る講義やフィールドワークを実施する。またジョン万次郎が生きた時代における国内外の不平等に関する課題を考えることで、より深く人権課題を理解し、世界的な視野での平等に関する探究を行う。

清水学際Ⅰ（１年生）

SDGs の目標である「11 住み続けられるまちづくりを」を意識し、学際的な学びに必要な、多角的に考える視野を広げる。具体的には、住み続けられるまちをつくっていくために、「14　海の豊かさを守ろう」では観光（環境）水産業、「15　陸の豊かさも守ろう」では森林や絶滅危惧種、「9　産業と技術革新の基盤を作ろう」では地域産業や地元企業、「10　人や国の不平等をなくそう」では人権や、パートナーシップについての学習を関連付け、これらの項目について多角的な学びができるよう取り組む。

清水学際Ⅱ（２年生）

経験を積む、貢献への意欲を高めることを目標に、自身が「社会の構成員であること、社会を変えることができる」ことを経験できる、具体的なプロジェクトを提案し、取り組む。

清水学際Ⅲ（３年生）

清水学際Ⅲの詳細については、現在検討中であるが、清水学際Ⅰ・Ⅱの探究活動を基盤として、英語運用能力やグローバル人材としての資質・能力を高めるため、海外の学校との交流活動を交えたプログラムとなるよう検討している。

＜学校設定教科・科目ワーキンググループの活動＞

月１回の定例会を開催し、「清水学際」のカリキュラムについて検討を行った。

ウ　校内検討委員会

校内検討委員会においては、総合的な探究の時間 WG、学校設定教科・科目 WG の進捗状況を管理し、総合的な探究の時間 WG、学校設定教科・科目 WG で出された意見をもとに年間計画を策定した。また、運営指導委員会による指導・助言に対する修正及び再構築等について協議した。

エ　来年度の取り組み

・令和７年度から実施する「清水学際」及び教科等横断的な学びにおいて、地域の自然産業、生活等について、広く深く学ぶ機会を設けることで、実態に即した本当の知識や技能を身に付け、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育成していくためのカリキュラム開発を行う。また総合的な探究の時間においては、「清水学際」及び教科等横断的な学びで得た知識・考え方・情報等をもとに一人一人が探究テーマを設定し、個人もしくはグループでの探究活動を行うことができるよう、カリキュラム開発を行う。

・教科等横断的な学びについては、校内 WG を中心に、SDGs の５つのゴールに関連する教科の単元内容をまとめ、来年度には教科横断マップを完成させる。各教科が教科等横

断的なつながりを意識した授業を計画する。

・総合的な探究の時間で、１年生では高知大学と協働し、生徒に探究の重要性を伝えるとともに、協力機関と連携し「清水学際」の取組を実践する。２年生では自由なテーマ設定で、１年間探究活動を実施するために協力機関との連携に向けた体制を整備する。３年生では、２年次に探究した内容をレポートとして整理し、成果を発表させる。

（７）管理機関における事業全体の成果検証、評価

本校が実現を目指す学びについて、高校魅力化評価システム（三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング）のアンケート結果より「清水高校が目指す学びについての生徒の変容」について、成果検証および評価を行った。アンケート項目及び、令和３年度～令和５年度の結果から、「主体性・協働性・探究性・社会性に関する自己認識」の項目が全国平均を下回っている。地域に積極的に関わる教育活動を通して、協働性や社会性を育むことができるよう、大学や地域の関係機関、地域連携コーディネーター等と連携し、カリキュラム開発を行っていく。

一方で、「地域における学習環境」においては、全国平均を上回っている。これは、生徒を取り巻く教育環境が恵まれているということであり、土佐清水市の強みであることが示唆された。本校では地域連携コーディネーターを配置し、地域や関係機関との連携を担っている。このことが探究や地域課題解決学習の推進に効果的であると思われるため、今後も地域連携コーディネーターと連携しながら、活動の強化を図る。

# Ⅳ　実践報告Ⅰ「１年生総合的な探究の時間　活動報告」

１　目標

探究における思考法、手法等について理解を深め、地域の課題について探究を行う。

２　年間の活動内容

別紙１参照

３　取組内容

（１）１学期の取組

高知みらい科学館・高知大学を訪問して「探究活動とはどのようなものか」や「問いを立てること」について体験的に学習し、探究学習のサイクルや手法を学んだ。その後、地域の魅力や課題を考える活動において、生徒から挙げられた観光・防災・産業・自然の４つの分野の現状を知る機会として外部講師講話を実施した。地域連携コーディネーターに協力を仰ぎ、上記４つの分野に関連する地域の方々を選定し、それぞれの分野についての講話をいただいた。詳細を以下に記す。

〇外部講師講話

目的：土佐清水市の現状や課題等について、各分野の担当者や取組を推進している方から直接話を聞く。また、聞いた内容をもとに新たな問いを立てたり、自分にできることを考える機会とする。

日程及び講師：

令和５年６月 12 日（月）７限　総合的な探究の時間

15:25～15:40　「土佐清水市の観光について」
講師：土佐清水市観光商工課観光係長
サーディナ　ジェイソン氏

15:40～15:45　質疑応答

15:50～16:05　「土佐清水市の防災（中浜地区の取組）について」
講師：中浜区長　西川　英治氏

16:05～16:10　質疑応答

16:10～16:15　生徒振り返り

令和５年６月 19 日（月）７限　総合的な探究の時間

15:25～15:40　「宗田節加工業の現状と販路拡大に向けた取組について」
講師：株式会社たけまさ商店　武政　恵美氏

15:40～15:45　質疑応答

15:50～16:05　「国立公園とは？これまでの 50 年と、これからの 50 年について」
講師：環境省土佐清水保護官事務所　小林　皆登氏

16:05～16:10　質疑応答

16:10～16:15　生徒振り返り

生徒の振り返りより（原文のまま）

（ア）観光分野

【ジェイソンさんの話の中で疑問に思ったこと】

・どうやって統計を出しているのか。

・観光客をとどまらせるのに具体的に何をしているんだろうか。

・なぜ 12 月は一番観光客が少ないのか。

【ジェイソンさんの話を聞いた感想】

・観光客が減ってきていることや人手不足でホテルが困っていることなど、課題が分かりました。

・課題の解決はすごく難しいので少しずつ時間をかけて解決していきたいし、貢献したい。

・土佐清水市にもっと観光客を増やすために私達ができる取組として SNS などで土佐清水市を PR したり、土佐清水市には魅力がたくさんあるのに全国に伝わっていないため良いところを見つけたりして、伝えていけるような活動ができたら良いなと感じました。

（イ）防災分野

【西川さんの話の中で疑問に思ったこと】

・どうして夜間避難訓練で 100 人以上人が減ってしまったのか。

・なんで若い人たちは避難訓練に参加したがらないのか。

・避難訓練をどうやって呼びかけているんですか。

・中浜だけではなく、清水全体で取り組むことができたら防災への意識が高まったり、救える・救われる命が増えると思う。（防災あんしん）カードのことやリュックを避難場所に預けておくことなどは特に清水全体で取り組めばいいのではないかなと思いました。

・防災あんしんシートを、義務付けるじゃないけど、広報誌と一緒に配って防災あんしんシートへの記入者数を増やしていくことはできないのか。

【西川さんの話を聞いた感想】

・それぞれの地区内であっても、考え方の違いがあって難しい課題だなと感じた。

・実際私も夜間避難をしたことはあるけど、最近は参加していなかったため自分の命を守るためにしっかり参加しようと思いました。またお年寄りの人は「年やけん、死んでもいい」と言う人が多くなってきているため、孫である私達が防災あんしんカードを書くようにお願いし、身近な人から声をかけてやっていこうと思いました。

・自主防災会の自主と自助共助の関係について考えながら聞くことができました。中浜では防災の色々な取組をしていてすごいなと思ったし、清水の中で、他にどのような防災対策をしているのか興味がわき、もっと調べてみたいと思いました。

（ウ）地元産業分野

【武政さんの話の中で疑問に思ったこと】

・何故メジカが捕れなくなっているのか。

・鰹節を作っていた店は宗田節製造に移ったといっていたが、今でも鰹節を作っているところはあるのか。

・見学以外で他に取り組んでいることはないか。

【武政さんの話を聞いた感想】

・工場見学とかをして観光にも力を入れていることに興味を持った。

・若い人が土佐清水の良さを発信していくというのは大切だけど、灯台下暗しという言葉があるように、身近にあってその良さに気づかないものもあるんだろうなと思いました。

・土佐清水市が誇れる地域産業もあるが、年々減少していっているのが惜しいなと感じました。出汁を使う料理はとても美味しく、どうにかならないかなと思いました。

・武政さんも言ってたけど「清水にいいところが無い」と嘆くんじゃなくて、自分が地域を探究して、いいところを少しでも多く広めていければいいなと思いました。

（エ）自然分野

【小林さんの話の中で疑問に思ったこと】

・国立公園として誰でも使っていいようになっているけど、誰かに壊されたり、傷つけられたりすることはないのか。

・自然災害で起きた被害。それもまた一つの自然ではないのかと思いました。

・ジオパークと国立公園の違いは何か。

・西南豪雨で森林などへの被害とサンゴへの被害はどちらが大きくて、復旧にどちらのほうが時間がかかったのか。

【小林さんの話を聞いた感想】

・僕は小学生の時に、小林さんのような環境省のレンジャーとの交流授業体験に参加した。今回の講話も踏まえて、これからの土佐清水のことについて、高校生になってもさらに考えていく機会になったので嬉しい。

・自然を守るということについても、お金がかかるため守るものにも優先順位がつけられてしまうのは何とも言えないなと思いました。

・土佐清水市は国立公園に指定されていて、自分たちもこのきれいな自然の中で育ってきたから、自然が壊れていくのは見たくないし、またサンゴや椿などが、なくなっていくのは嫌なので、何かできることはないかなと思いました。

生徒が作成した土佐清水市の魅力（左）と課題

外部講師の様子

（２）２学期の取組

６つの班に分かれてそれぞれのテーマに沿って探究活動に取り組んだ。10 月末にはそれまでの活動をスライドにまとめて中間発表を行い、自分たちの振り返りや聞き手からのフィードバックをもとに、活動計画内容の修正を行った。

探究テーマ及び発表タイトル一覧

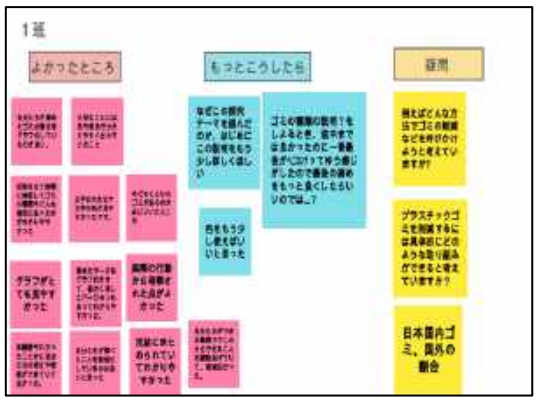
| 班 | 人数 | テーマ | 発表タイトル（最終発表時） |
|---|---|---|---|
| 1 | 4 | 自然 | 海と人との共存 |
| 2 | 3 | 人 | 清水への移住者がもっと増えるために |
| 3 | 4 | 人（防災） | 避難訓練の参加者を増やすために |
| 4 | 4 | 観光 | 清水の魅力発信 |
| 5 | 3 | 観光 | 清水に来てもらうためには |
| 6 | 4 | 食 | 日常的に宗田節が使われるようになるには |

（３）３学期の取組

１月末に学年発表会を行い、講話をしていただいたジェイソン氏、西川氏、小林氏にも参観していただいた。発表会後の授業では、クラスメートから端末の情報共有ソフト Jamboard を活用しコメントを記入してもらった。参観していた教員や地域連携コーディネーターからのコメントを参考に、校内発表会に向けて発表練習や発表資料等の改善及び修正を行った。２月の校内発表会では、２年生と教職員に向けて全ての班が発表を行った。

学年発表会の様子

学年発表会での Jamboard のコメント




学年発表会後の授業の様子

５班作成スライド（一部抜粋）

６班作成スライド（一部抜粋）

４　成果と課題

地域の現状や課題などを聞く機会を得たことや、自分たちで考えたテーマで探究活動を進めていくことで、地域についての理解がさらに進んだ。また、アンケート調査やインタビューを実施し、地域をより深く知るために関係施設や地元の観光地を訪問するなど、「考え、行動する」点では、どの班も活動できていた。生徒は、探究活動の流れを理解して活動に取り組むことができていたといえる。

さまざまな手法で情報を収集できた点は良かったが、何のためにその情報が必要なのか、得た情報を次にどのようにつなげるのか、といった見通しをしっかりともてていなかった。また、情報の整理・分析に十分な時間をかけることができなかった班もあり、取組に差が生じてしまったこともある。次年度は、情報の整理・分析の指導についての共有とあわせて、今年度の年間計画を参考に、取組の精選を図るよう引継ぎたい。